

## 地域が共有する資源「ハスカップ」のこれから

草苺 健

昭和 50 年林学科卒業

### ●ハスカップの現状

昭和 40 年代、時の減反政策が追い風となって、勇払原野のハスカップを移植しそれを親木にした小果樹としての栽培が盛んになった。苫小牧ではすでに羊羹や「よいとまけ」というハスカップを使ったお菓子類も出ていたところで、それに新しい製品も加わると同時に国内航空路線の機内食に用いられるなど、大小のブームの波が押し寄せる中、ハスカップの栽培も進んだ。もちろん、勇払原野周辺の住民にとっては、ハスカップ摘みは相変わらず 7 月の夏の風物詩であり、各々なじみの場所に向かい採取は淡々と行われてきた。開拓のころから、梅干しの代用品として塩漬けにされたりリキュールにされたりしたが、庶民は砂糖をかけて食べる生食やジャムとしていただくことも多かった。いずれにしろ、生で食べるハスカップと自家製加工品は、どのみち、きわめて珍しい超ローカルな食べ物であった。

そのハスカップが、機能性食品としても注目されて今やポストブルーベリーの位置にあるという。アイヌの名称である Haskap という英語表記が世界共通の言葉として用いられるようになり、花卉園芸の分野では文字通り世界のハスカップとしてデビューした、と農学部の鈴木卓准教授からお聞きしたのが平成 26 年頃だった。

令和元年 8 月、第 51 回時計台サロンはテーマが「世界が注目。Haskap (ハスカップ)」だった。勇払原野の第 3 セクター苫東で、現況調査や移植・分譲活動を行い、離職後は NPO として原生地をサンクチュアリと呼んで保全のための調査などをしてきたなどの関係で、サロン前半の 45 分、現地報告の時間をいただいた。二本立て講演の後半は農学研究院の鈴木卓准教授で、世界のハスカップの位置をくわしく紹介されたので、わたしはその前座のつもりで、気楽に過去、現在、未来を放談風にお話した。

### ●ハスカップ市民史『ハスカップとわたし』の発刊

わたしにとって実はタイミングがとてもよかった。この年の 3 月末に、勇払原野のハスカップを愛する人々の市民史『ハスカップとわたし』という本を中西出版から出したばかりだったからである。この本はわたしが事務局をあずかる NPO 苫東環境コモンズがまとめたもので、開拓時代のハスカップの様子や栽培関係者など、ハスカップのステークホルダーからできるだけ万遍なく聞き取りし、寄稿もらい、あるいは講演してもらった内容を幅広くまとめたものである。当日は、このような 7 年越

しの取材エピソードを交えながら、地元ならではの視点でハスカップの今とこれからを紹介した。

紙幅の関係で大雑把にその要点をまとめると、およそ次の通りとなる。

- ・ハスカップは宅地や耕地以外ならばどこにでもあった（西は錦岡、東は厚真の軽舞あたり、北は南千歳あたりまで）
- ・ハスカップは苫小牧など近隣住民だけのきわめてローカルな食文化で中心は苫小牧
- ・開発とのはざまで揺れて苫小牧のハスカップは社会的背景が濃い（だから本になった）
- ・今は湿原ではなくハンノキなどの林の中に大群落があり徒長し枯れているものも目立つ
- ・「アイヌの不老長寿の妙薬」説は、お菓子のキャッチコピーとして創作された
- ・「悲劇のヒロイン」として仕立てられたが、実際は関係者の営為で保全され地域が共有するコモンプール資源として認識され始めた。「悲劇」の認識は一部の郷土史観
- ・原生地・ハスカップサンクチュアリー帯は、安平川の河川内調整地として保全が確定、いずれはラムサール条約登録湿地として追加登録に向かっている。苫東の緑地になるのではない
- ・ハスカップという栽培原種が自生の状態でも初めて安住の地を得ることになる

#### ●コモンズとして共有するための課題

北海道は歴史が浅いことと人口密度が本州に比べ低いことから土地の所有感覚が本州とは違うと指摘されてきたが、コモンズという社会背景を概観すれば、むしろ北欧の「万人権」(everyman's right)に親近感が持てる。北海道ではコモンズという言葉自体が耳新しいが、勇払原野のハスカップと雑木林は、市民が容易にフリーアクセスできるコモンズのように利用されてきた。ハスカップ原生地を、果実の採取ができるコモンズだと公表または宣言するのであれば、「コモンズの悲劇」を生まないようなルールが求められるようになるだろう。そこが絶滅の危惧される野鳥たちの繁殖する宝庫であればなおさらである。きわめてローカルな地域の食文化を守りながら遺伝子資源としても保全し、なおかつ希少性を持った野生の動植物のスペースとしての意義も注目される文字通りのワイズユースが求められるだろう。願わくば、排他的ではない賢い利活用を探りたいところである。